

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：31502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16775

研究課題名(和文) 消えた音を求めて 初期中英語期における異綴り分析と発音変化の研究

研究課題名(英文) Searching for the Lost Sounds: a Study of Variant Spellings and Sound Change in Early Middle English

研究代表者

狩野 晃一 (Kano, Koichi)

東北公益文科大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：90735648

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：2015年度から3カ年に渡り、初期中英語期に筆写された写本等に現れる異綴りと発音の関係について調査をしてきた。特に現代英語<-ght>として現れる古英語-htの変化(摩擦音/h/がいつ消失するのか)について取り扱った。その結果、一般的な英語史で言われているよりも少なくとも4半世紀あるいは半世紀ほど早く認められることが確認された。またその変化はある方言から別の方言へと方言単位で組織的に推移するというよりは、それぞれの語によって変化の速度が異なることが明らかとなった。また英語音韻史研究における方言テキストの徹底的な再調査の必要性を感じた。

研究成果の概要(英文)：For the last three years (2015-2018), I have been exploring the relationship between the variant spellings and pronunciation which are found in the manuscripts written during the early Middle English Period (c.1150-1300). The change of Old English consonant cluster -ht (modern English <-ght>) and the timing of the loss of the fricative sound /-h/ were especially dealt with. The results show that the change could have occurred 25 to 50 years earlier than we usually think, and that the speed of change differs from word to word rather than undergoes systematically from one dialect to another. It is also clear from the project result that we need exhaustive re-examination on dialectal texts for the study of the history of English phonology.

研究分野：歴史英語学, 英語音韻史

キーワード：英語史 音韻史 綴り字 方言 初期中英語期 発音

1. 研究開始当初の背景

英語発音の歴史はしばしば標準英語発音の歴史と同等に考えられ、またその確立に重きが置かれており、方言レベルでの発音と綴り字の関係についての検証はさほどなされてこなかった。異綴りに関連する研究の多くは語彙、形態、統語、韻律などに比重が置かれており、我が国における音変化(特に中世のそれ)研究は立ち遅れていると思われる。また言語資料は文学作品から採られるのが主流であったことから、より広範な種類の資料を使用し、改めて発音変化に対する研究の必要性を感じていたことが本研究を始めるきっかけである。

2. 研究の目的

英語発音の歴史において、かつて発音されていた音が発音されなくなり、それが元で異なる発音の変化が引き起こされた。例えば 'light' の <gh> の部分 (/ç/) である。この子音消失は中英語期に起こったとされているが、「いつ・どこで・どのように・どのような語から」起こったのかについて十分に解明されているとは言えない。本研究では現在入手可能な言語データと写本や断片等から得た情報を併せて、種々の発音が変化した軌跡を辿る。この研究を通して得られる結果によっては、従来考えられてきた変化の時期設定を修正することが期待される。言語資料を文書の種類や方言別に分析し、また古写本に現れる写字生の行動や習性から導き出される言語変化の痕跡も踏まえて、英語発音の歴史的研究にあらたな知見を創出したい。

3. 研究の方法

Laing and Lass (2003) の理論に基本的に従って、既存の資料を用いて州ごとに言語分析を行う。同時に海外図書館等から取り寄せた写本のマイクロフィルムやデジタル画像からテキストを転写し、独自に資料を整備、データベース化をはかる。マイクロフィルム等で判読不可能な箇所については渡英し写本収蔵の図書館にて調査を行う。図書館によっては近年、写真撮影が可能となり日本に画像を持ち帰って検証することができる。1年目から2年目は方言地域ごとに言語分析結果をとりまとめ、3年目は残りの方言地域について調査分析を完了させ、初期中英語期の音変化の様子を俯瞰する。最終的にデータベースから異綴り、その総数、方言、写本の形態、写字生の書体などの項目で検索が可能な状態にしておくことで今後の研究に活用可能である。

4. 研究成果

(1) 『初期中英語期言語地図』をもとに当年度必要な写本関連の情報(収蔵図書館、制作年代、方言、書体)をまとめた一覧を作成し、計画にあるように北部方言及び南部方言のテキスト分析を進めた(写本画像を取り寄せ

ての転写作業もこの中に含まれる)。

まず古英語 Old English (OE) -ht の前の母音が前母音であるか、後母音であるか、その環境によって分類し、古英語 -ht に対する初期中英語期の異綴りを抽出し、比較をした。特によく現れる3語(BRIGHT, KNIGHT, MIGHT)について調査を行った。前母音+OE -ht の環境では、北部方言において、摩擦音 /ç/ のない形 <-t> が少なく、主要形は <-ht>、ついで <-ght><-3t> であった。南部方言では摩擦音 /x/ のない形 <-t> は全く現れず、<-th> という形が1例のみ見られた。主要形は北部と同じく <-ht> である。また、後母音 + OE -ht の環境では、北部方言の主要形は <-ht> で <-ght><-3t> が同様に続く。南部方言では用例そのものが少なく、わずかに <-ht> と <-3t> が1例ずつあるのみであった。

以前より研究を続けていた後期中英語期における異綴りの問題について、この調査での知見も加え紀要に投稿した(雑誌論文)。

(2) 平成28年度は写本画像からのテキスト転写に加え、『初期中英語期言語地図』(A Linguistic Atlas of Early Middle English, ver. 2)からの言語情報と実際の写本情報を照合する作業を進めた。進めていく中で、写本、方言、書体、内容等についての情報もまとめ、適宜参照できるようにするためデータベース化した(未公開であるが体裁等整い次第順次公開予定)。

平成28年7月にはそれまでの研究成果を英国リーズ大学で行われた国際中世学会(International Medieval Congress)で 'Digression or Progression?: An Analysis of the Variant Spellings of Old English -ht in the Early Middle English Period' と題して発表した(学会発表)。この内容は 'On the Variant Spellings and Their Sounds of Old English -ht in the Early Middle English Period: A Brief Survey' として論文にまとめた(雑誌論文)。

続く9月にはロンドン、オックスフォードを中心に写本調査を行い、マイクロフィルムなどの画像では不鮮明であった部分について、直接写本との照らし合せ、不明点を明らかにした。また、それまでの本研究における言語検証は主に「綴り字」と「脚韻」に頼って進めてきたが、この伝統的な方法論だけでは限界があると感じ、新たな視点、すなわち「写字生による加筆・修正 addition / correction」を加えることにした。まだこの理論には洗練が必要であるが、有効なものであると認められた。この観点から行った北部方言テキストに関する研究の一端を、第98回チヨウサー研究会において「写字生の修正/習性から見る初期中英語期北部方言の諸相」として発表した(学会発表)。

(3) 『初期中英語期方言地図』のデータと自らが収集したデータを元に発音変化の検証

にあたった。昨年度の終わりに口頭発表したものを活字にした(雑誌論文)。新たに取り入れた分析の視点である「写字生の修正」を様々なテキストにあてはめ、ある程度の進展を見た。その成果をポーランドのポズナンにあるアダムミキエヴィッツ大学主催の国際学会(The History of the English Language - Poznan; 2017 Conference)で口頭発表を行い、好評を得るとともに参加者からの有益な指摘や助言を受けることができた(学会発表)。

他言語(古ノルド語、古フランス語、アングロ・ノルマン語など)からの綴り字(および発音)への影響については、例にあげた全ての言語について書記法を検討することはできなかったが、アングロ・ノルマン語を扱うことができた。Anglo-Norman Text Societyから刊行されているテキストに現れる綴り字の分析を進める過程でいくつかの興味深い関連を見つけた。一例として、かつてアングロ・ノルマン語の影響によると言われていたOE -htに対する<-ght>という綴り字が最初に現れるのが影響の強い南部ではなく北部方言に見つかることが挙げられる。これは当時の写字生の行動(移動や経路など)を再考する必要を匂わせるものである。

上記3カ年の研究により、以下のことを明らかにした。(1) OE -ht の摩擦音の消失はすでに1300年代初頭には進行しており、(2) その進み具合は語により異なる。(3) 摩擦音消失の最も早い例は西中部方言のテキストに現れ、次にイースト・アングリア方言に見られる。(4) 全体として摩擦音消失の時期を現在まで考えられてきたものよりも25年から50年ほど早く設定することができるのではないかと提案した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

KANO, Koichi. 「Observations on Dialectal Forms and Standardisation in the Vernacular Texts of Late Medieval Norfolk」東北公益文科大学総合研究論集 第29号, pp.39-54. (2015年)

KANO, Koichi 「On the Variant Spellings and Their Sounds of Old English -ht in the Early Middle English Period: a Brief Survey」東北公益文科大学総合研究論集 第31号, pp. 1-13. (2016年)

狩野晃一「写字生の修正から初期中英語期発音の変化を検証する」東北公益文科大学総合研究論集 第33号, pp. 1-13.

(2017年)

〔学会発表〕(計3件)

KANO, Koichi. 「Digression or Progression?: An Analysis of the Variant Spellings of Old English -ht in the Early Middle English Period」2016 International Medieval Congress, University of Leeds (リーズ、イギリス) (2016年7月)

狩野晃一「写字生の修正/習性から見る初期中英語期北部方言の諸相」チヨースー研究会 第98回研究発表会、日本大学(東京) (2017年3月)

KANO, Koichi. 「Reconsideration on sound change and scribal corrections」(2017年11月) History of the English Language in Poznań 2017、アダムミキエヴィッツ大学(ポズナン、ポーランド) (2017年11月)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狩野 晃一 (KANO, Koichi)
東北公益文科大学・公益学部・准教授
研究者番号: 90735648

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

堀田 隆一 (HOTTA, Ryuichi)

慶應大学・文学部・教授

研究者番号：30440267

池上昌 (IKEGAMI, Masa)

慶応大学・名誉教授

研究者番号：なし

Terry Hoad

Fellow of St. Peter 's College, Oxford

研究者番号：なし